北海道十勝地域における若手農業者・産業人の新たな農業・農村地域の模索
――「十勝人チャレンジ支援事業」採択者に焦点をあてて――

高知大学　佐藤洋子

本報告では、北海道十勝地域で進められている地域政策「フードバレーとかち」において、若手農業人・産業人の育成を目的に行われている「十勝人チャレンジ支援事業」に着目し、その社会的意味を考察する。

対象地域である北海道十勝地域は、恵まれた土地資源を生かし、畑作（小麦、豆類、馬鈴しょ、てん菜等）や酪農を中心とする農業が展開している地域である。十勝の販売農家 1 戸あたりの経営耕地面積は 35.2ha と都府県平均のおよそ 25 倍に達し、大規模で機械化された生産性の高い農業が行われている。また販売農家に占める専業農家の割合は 74.9%と非常に高く、年間 125 名程度が新規に就農している。新規就農者のほとんどは学校卒業後ただちにあるいは他産業での就労を経て就農する農家出身者であり、若い後継者が農業を担うことができている地域といえる。

こうした状況のなか、十勝地域では 2010 年から、帯広市を中心としオール十勝で進める地域政策「フードバレーとかち」が進められている。これは「農林漁業を成長産業にする」、「食の価値を創出する」、「十勝の魅力を売り込む」という 3 つの柱を軸に、十勝の強みである「食」と「農林漁業」を生かした十勝型フードシステムの形成を進め、アジアの食と農林漁業の集積拠点をめざそうとするものである。

この「フードバレーとかち」のなかで 2013 年度から、十勝の産業の発展に寄与する人材の育成を目的とする「十勝人チャレンジ支援事業」が行われている。この事業は十勝管内の 20～40 代の農林漁業・商工業に従事している人を対象に国内外の先進地域での調査研究の経費を補助するものであり、2015 年度までの 3 年間で農業者や農業関連産業の取り組みを行う若手農業人・産業人 25 件 29 名が採択されている。彼らは主に海外での視察研修を行い、学んできた内容を自身が取り組む農業や農業関連の仕事に生かしている。また採択者同士あるいは採択者とその他事業者間の交流の場が設けられたり、教育機関と連携した採択者による中学校での特別授業が行われたりといった波及効果が生まれている。さらには採択者へのインタビューの過程で、採択者同士のつながりから新たな協働が生まれていることが明らかになってきている。

農業後継者の問題がなさそうに見える十勝において、なぜいま若手農業人や産業人を育成するプログラムを実施する必要があるのだろうか。実際に採択された人たちはどのような取り組みを行い、十勝の農業に対してどのような展望を持っているのだろうか。採択者同士のつながりから生じている新たな展開をどのように位置づけることができるだろうか。本報告ではこれらの問いについて考えてみたい。北海道、とりわけ十勝の農業は都府県の農業のあり方とは異なると思われるかもしれないが、本事例をとおして、現代の地方農業・農村地域で地域の担い手をどう育て、地域での協働をどう展開していくことができるか、その可能性を探っていきたい。